

私の食と世界の食文化について

宗像市立日の里中学校 2年 大城 心菜

私はベジタリアンだ。「宗教なの？」とよく聞かれるが、宗教上の理由ではない。中学校には、毎朝母が作ってくれる弁当を持って登校している。私がベジタリアンになったのは、幼稚園の頃だ。生命倫理や動物福祉の観点から生き物を大切にしたいという思いで、可能な限り動物性の食事をしない、身に付けない生き方をしたいと母に自ら伝えたことから始まった。

私は沖縄県出身で、国籍問わず外国人の方々が常に身近にいた。私の住んでいた地域では特に海外住宅地が多く、幼稚園や小学校にも海外の友達、海外と関わりが深い知り合いがたくさんいた。このような環境だったからか、私はベジタリアンという存在がそう珍しくないと感じていた。しかし、福岡の小学校へ転校した際、周りの反応を見て「私の食事は変わっているのだな」と強く実感した。周りから「ベジタリアンなの？ありえないね」「理解できない」などと言われることが何度もあった。全ての人が同じ考えでないことは分かっていたので一意見として受け入れつつ、「私は食事に対する偏見を持たないようにしよう」と意識していたつもりでいた。

中学校に入学し、「なんで学校に弁当を持って来てるん？」と聞かれることが以前より更に増えた。上手く説明できなかつたのでインターネットを使い、いろいろと調べてみた。そこで私が知らない様々な食文化があることを知った。ベジタリアンにも多くの種類があることに驚いた。特に目に留まったのは、果実食主義と呼ばれるフルータリアンと、完全菜食主義者と呼ばれるヴィーガンであった。「栄養が絶対足りてないでしょ。卵とか牛乳とか飲食できなくて可哀想。」と思ってしまった。私はその時、今まで批判的な言葉をかけてきた周りの人たちの気持ちが少し分ったのと同時に、自分のものさしで物事を考えてしまった自分が一気に恥ずかしくなった。

その後も食文化について調べていると、世界中にはものすごく多くの異食文化があり、それぞれの食で生きていることを知った。また、その人たちにはその食生活を続けていく立派な理由があることを知り、自分の知り得る範囲で物事を判断し、決めつけることは恐ろしいと実感した。

食文化に対する偏見をもたないために、まずはいろいろなことを知る、相手のことを知ることが大切で、きっとこれが多文化共生に繋がるのだと私は思う。これは食文化だけではなく、人種差別やジェンダー問題にも関連することである。相手のことを理解しようとすることができる自分でありたい。一人一人の個性、心情や考え方が尊重できる、大事にできる自分でありたいと強く思った。